第Ⅰ部
地域の遺跡・寺社・石塔からみた
城南区の歴史

桃﨑祐輔（福岡大学人文学部　考古学）

第Ⅰ部　地域の遺跡・寺社・石塔からみた城南区の歴史

桃﨑祐輔（福岡大学人文学部　考古学）

城南区は、南に聳える油山と、その山麓を流れ博多湾に注ぐ樋井川によって基本的な景観がかたちづくられていますが、これらの地勢は、人々の暮らしや台地への働きかけによって大きく変化しています。縄文時代前半の温暖化や海進によって博多湾が形成されると、そこに注ぐ樋井川の河口には、地質学で「古鳥飼湾」と呼ばれる入江ができあがりました。

この入江は、古代から中世にかけて、「草ヶ江」と呼ばれていたようです。樋井川は当初、この入江に注いでいましたが、黒田の入府によって福岡城が築城され、草ヶ江が外堀化されると、河道の付け替えが行なわれ、樋井川は西新、現在のヤフードーム方面に流路を変え、直接博多湾に注ぐようになりました。「草ヶ江」の時代、この入江には船舶の停泊する「津」があったと考えられ、旧海岸線に沿って古墳や中世の石造物などを見ることができます。以上を踏まえながら、寺社や石造物が残された時代背景を概観してみましょう。

1　原史・古代

1）　宝台遺跡出土の甕棺

宝台団地 6 棟東側宝台管理サービス事務所入口付近に、宝台遺跡から出土した弥生時代中期後半～後期初め頃の須玖式の甕棺が展示されています。大型の合口甕棺は成人の、小さな甕は幼児や小児の埋葬に使われたものです。この時期は、弥生時代のムラの統合が進み、紀元前 108 年に、現在の北朝鮮の平壌（ピョンヤン）付近にあった古朝鮮国が滅ぼされ、漢の植民地である楽浪郡が設置され、『漢書』地理誌に倭人が百余国をなしていたと記録された時代です。中国との外交によって奴国や伊都国に王墓が出現し、城南区でも丸尾台で前漢鏡や鉄の素環刀をもつ首長が現われました。宝台の甕棺墓にはベンガラ（酸化鉄）を塗った赤い儀礼用土器が供えられていますが、副葬品はほとんどなく、少数の人達が貴重な財宝を独占し、他の大勢の人々を支配する社会に移り行く状況が窺えます。

2）　梅林古墳と油山山麓の古墳群

梅林古墳は、全長 27m、後円部径 15.5m、高さ 3m の小さな前方後円墳で、市営住宅の工事中に発見され、関係者の尽力で保存・復元整備されています。後円部には西向きに開口する羽子板形の横穴式石室が埋め戻し保存されています。石室の中から、須恵器、土師器、鉄器（鏃（やじり）、斧、タガネ、刀子）のほか、鞍金具などの馬具、ガラス製の管玉や小玉などが出土しました。5 世紀後半の築造で、6 世紀初めにも追葬されたようです。注目されるのは、朝鮮半島産の鳥の足跡のような文様がある土器が出土したことで、韓国の全羅南道榮山江流域の製品の特徴です。同様な土器片は福岡大学東側の自修寮内にある小袖古墳でもみつかっています。ここも、小規模な前方後円墳である可能性があります。

梅林古墳の前庭部や近くの梅林遺跡の竪穴住居からは鉄滓が出土し、タガネの出土とあわせ、鍛冶集団との関わりを示しています。梅林遺跡では、中国・朝鮮半島風の大壁建物や、カマドの煙熱を壁沿いに循環させる暖房装置「オンドル」をそなえる住居がみられるため、渡来系の人々が暮らしていたと考えられます。

梅林遺跡では、身分の高い人が大壁建物群、一般の人々はオンドル付きを含む竪穴住居群に住んでおり、その間は柵で区切られ、身分ごとに住む場所が区別されていたようです。また大壁建物群の側にある倉庫には、生産物が納められていたようです。

雄略天皇 20 年（475）、高句麗長寿王の攻撃で百済漢城（ソウル）が陥落して蓋鹵王が殺され、478 年に倭王武＝雄略は南朝宋に遣使して高句麗の非道を訴えました。雄略紀 23 年（479）4 月条によれば、百済の文斤王が死し、雄略は昆支王の 5 人の皇子の中で、最も聡明な 2 男の末多王（牟大）に兵器を与え、筑紫の国の兵士 500 人を遣わして、百済へ護送し、東城王として即位させたとあります。これと同じ年、筑紫の安致臣・馬飼臣らが船軍を率いて高麗を討ったとあります。475 年の高句麗の攻撃による百済王都漢城の陥落と滅亡、479 年の百済王子牟大の護送と遷都熊津での東城王への即位、筑紫の支援軍とみられる筑紫安致臣・馬飼臣と高句麗軍との戦闘など、雄略朝の百済支援に関与した集団が油山山麓にもいたと想像されます。特に梅林古墳や小袖古墳で出土した朝鮮半島産土器の故郷である栄山江流域は、韓国で唯一、日本的な前方後円墳が集中して分布する地域です。韓国の前方後円墳の解釈は諸説ありますが、国土の北半を高句麗に奪われた百済が、倭の軍事支援をうけながら南部地域の経営を強化したことと関係するとみられています。特に梅林古墳は、石室構造が韓国光州市月桂洞（ウォルゲドン）古墳や新徳（シンドク）古墳と類似することが注目されており、油山山麓の集団も朝鮮半島に渡って活動し、朝鮮半島の土

器や装身具、先進技術が持ち帰られたと考えられるのです。

渡来系の鍛冶職人が多く居住した油山山麓は、磐井の乱後に設置された那津官家でも、重要な役割を担っていたようです。油山山麓には総数300基以上の小さな古墳がありますが、そこに葬られたのは、官家への貢納や労働奉仕などで古墳づくりを認められた新興の人々でした。また中央区との境にある鳥飼は、那津官家に水鳥の飼育で奉仕した鳥飼部たちの故地と推定されます。現在中央区に移転した鳥飼八幡宮の縁起について、「福博古図」には、神功皇后が新羅から帰朝の折、この地（鳥飼八幡宮古宮）で鳥飼氏が差し上げた夕餉を賞味されたので、後年同氏がそこに廟を建て若八幡と号したと書かれています。かつて別府には「塚原」と呼ばれた場所があり、たくさんの古墳があったようですが、あるいは鳥飼部たちの墓地であったかもしれません。

3） 奈良・平安時代の油山山麓と飯倉D遺跡の氷室

城南区内では、七隈の飯倉D遺跡や、堤の笹栗遺跡で、奈良時代の製鉄址がみつかっており、南区の老司でも、観世音寺の瓦が生産されています。油山山麓には、山の木材を燃料や木炭として大量消費する製鉄・鍛冶・瓦生産に関わる集団がいたようです。

七隈の飯倉D遺跡では、奈良～平安時代の集落や、9世紀頃の官衙の可能性がある建物群、製鉄の痕跡のほか、氷を貯蔵する氷室と思われる遺構も見つかっています。氷室遺構は円形で擂鉢型の土壙に細長い排水溝を付設したもので、那珂川町のカクチガ浦遺跡でも同じような施設が見つかっています。温暖化が進み猛暑が続く現代では想像もつきませんが、油山山麓ではかつて、氷の生産と貯蔵が行なわれていたようです。かつて樋井川や七隈川が草香江津につながっていたことを考えれば、鴻臚館で使われたことがまず考えられます。その用途は食用―たとえば酒に浮かべたオンザロックでしょうが、身分の高い人物の遺体の腐敗を防ぐために氷を使うこともありました。現地は今では住宅地となっていますが、七隈3丁目に残る水ケ浦池は、氷室の氷を生産した池のあとかもしれません。

早良区野芥遺跡では、10 世紀の大型建物が検出され、越州窯青磁や陶硯の出土より野芥郷庁の遺跡とみられています。城南区内では片江B遺跡で奈良時代の建物跡が2棟が見つかっており、城南区田島 A 遺跡7次調査では越州窯青磁輪花皿や瓦器碗を伴う掘立柱建物群が検出され、10～11 世紀の集落跡とみられています。

2 中世

1） 鴻臚館体制の崩壊と野芥荘・草ヶ江津

外交使節の受け入れ窓口である迎賓館として、古代社会の管理貿易を統括する存在であった鴻臚館は、9～10 世紀以降、私貿易のための商館に変容しつつも、唐・新羅・呉越・北宋などの賓客・商人を迎える公的機関としてまがりなりにも存続していましたが、11 世紀前半に廃絶します。永承二年（1047）年、大宰府が「大宋商客宿坊」に放火した犯人を捕縛したとの記事があり、これと対応するように、鴻臚館では 11 世紀中葉を境に、遺物が出土しなくなり、放火による火災によって機能が停止したと考えられます(大庭2004)。

『宮中縁事抄』（鎌倉遺文一五七）所収の中原師尚勘状に、仁平元年（1151）の大追補の記事があります。大宰府目代宗頼の指令で、大宰府検非違所別当安清・執行大監種平・季実らが筥崎・博多の大追捕（一斉摘発）を行い、「始自宋人王昇後家、運取千六百家資材雑物」、大宰府の役人に襲撃された博多チャイナタウンの宋人商人たちの首魁と目される宋人王昇後家を始め 1600 家の資材・雑物を運び取りました。追捕は筥崎宮乱入・破却にまで及んだとされ、破却の標的は筥崎宮でした。この事件の背景には、府務運営を担う府官内部の対立や権帥一目代の筥崎宮支配の強化、筥崎宮宮司で太宰府の官人にも入っている秦氏などの反対勢力を排除しての貿易直轄化の志向などが推測されます。

外国商人からすれば、日本の官吏さえも海賊や盗賊と同様危険な存在でした。しかし彼等も手をこまねいていたわけではなく、箱崎や博多の外に新天地を求め、本拠地を移動したりしたようです。こうして 11 世紀後半頃から開発が進んでいた油山山麓や樋井川河口の草ヶ江津にも、中国商人が居を構えていた可能性が高いのです。

京都栂ノ尾の高山寺は、栄西禅師と親しかった明恵上人ゆかりの寺ですが、この寺に伝わる「養和元年(1181)十一月二十三日紀俊守自筆言上状」（『高山寺文書』二十五号）によれば、平安時代の後半から鎌倉時代初めの城南区付近には、油山の麓から鳥飼干潟に及ぶ八条院領筑前国野芥荘と呼ばれる巨大荘園があり、709 石の所当米を負担していましたが、不足する年貢米を補うため、廻船で各地の市を巡回し、塩を売り米を買ってまかなうのが「御庄の習」であったとされています。よって野芥荘の沿岸部にあたる鳥飼干潟周辺の海岸には塩田があり、浜で塩を焼き、各地で交易して利益をあげていたと考えられます。

2） 油山天福寺の創建と浄土宗第二祖・聖光上人

城南区には、多数の寺社や石造物がありますが、中でも最も古いのが、油山天福寺です。この寺は、奈良時代にインド僧清賀上人が開いたと伝えますが、西油山経塚では、1099 年銘のものを最古として 40 余の経筒が見つかっていますが、大半は盗掘・売却されて全国に散逸しています。寺院の建立にあたっては、地鎮のために地面を掘って経を埋めることが多いので、油山天福寺が本格的に寺院として整備されるのは、この頃からと考えられます。

このうち滑石製外容器（高さ 32.8cm、胴部最大径 26.6cm）の一つに、「如法妙法蓮華経二部承得三年（歳次己卯）九月　廿八日奉供養次月廿八日　奉納勧進本願主僧経得　同年春死亡依之今請取　海安任女清原氏所生子　男三人女二人異口同音供養了　本知愚僧延久相共也　當宮大宮司次々僧官□□僧官上下助成人駈士□□雑役輩庁聞随喜願　僧良久草部氏僧埼朝延任　藤井国重田口友重明行行人　僧長増之類」銘があり、承得三年は「承徳三年」で 1099 年、八月二十八日に康和と改元されています。内刳りは深さ 28.6cm、径 23cm と大きく、如法経二部を収納したとの銘と一致しています。

この銘文中に、「草部氏」の名が見えることが注目されます。草部氏＝日下部氏は、『古事記』仁徳天皇段に、「亦大日下王の御名代として大日下部を定め、若日下王の御名代として若日下部を定む」とありますが、『古事記』の雄略天皇段には日下（現在の東大阪市日下）にいた若日下部王を訪れる雄略天皇の求婚説話に関連して、皇后の若日下皇女の名代として各地に日下部が設置されたことを記しており、こちらが実態に近いと考えられます。東大阪市日下から四条畷市の周辺は、生駒山西麓の「河内の馬飼」たちの本拠地で、日下部（草部）氏も古代の馬飼育との関係から、各地に拡散したと考えられます。樋井川河口にあった「草香江津」と、その岸辺にあった警固丸山古墳（現在の筑紫女学園高校グランド）からみて、雄略朝の５世紀後半から、那津官家の設置された 536 年頃の間に、当地に日下部氏が入植し、附近を「日下部津＝草香江津」と呼ぶようになったのではないでしょうか。

このほか、山内権現山から発掘された四王寺型経筒に「保安元年（1120）歳時庚午八月廿五日日時癸巳／勧進僧慶實／助成檀那宗形信貞／并津氏」銘が判読されています。津氏は宗像氏周辺の氏族です。他にも四段積上式、滑石製、陶製、青白磁経筒・外容器、「段家合記」銘青白磁合子・湖州鏡・懸仏・陶磁器などが出土しています。

浄土宗鎮西派の開祖で浄土宗第二祖にあたる聖光上人も、当初は天台の学僧としてこの寺の学僧でした。道光の記した「聖光上人傳」に、「善導寺　筑後國開山聖光上人。諱は辨長。順乗堅者孫。筑前國加月庄人也云々。學成望遂。還干故郷。時年二十有九。建久元年庚戌（1190）也。次年補一寺油山學頭。學徒諍席。衆人成林云々」とあり、比叡山に学んだ聖光が、浄土宗転宗に先立ち、1191 年に油山学頭となったことは注目されます。

聖光房弁長（弁阿）（1162～1238）は、筑前国香月（北九州市八幡西区）の出身で、父は古川則茂です。仁安三年（1168）に出家して、安元元年（1175）観世音寺の戒壇で受戒して僧となりました。寿永二年（1183）、比叡山に登り観叡に師事し、後に証真に師事しました。建久元年（1190）、故郷に帰ると油山の学頭（統率者）となりますが、建久四年（1193）、異母弟三明房の死に臨んで無常を感じ、浄土教に惹かれるようになります。現飯塚市の明星寺五重塔建設に際して、安置する本尊の注文の為、建久八年（1197）に上洛した折、当時、都中の話題となっていた念仏僧の法然を訪ね、その日のうちに弟子となり、その後都を離れて故郷の筑前に戻り、筑後・肥後に念仏の教えを弘めました。筑後国高良山麓の厨寺（現厨山聖光院安養寺）で千日の不断念佛を勤め、奇瑞を顕して多くの信者を獲得しました。後に筑後国山本（現在の久留米市）に善導寺を建立して九州での念仏の根本道場としました。弟子には三祖の然阿良忠をはじめ、宗円・入阿など多くの念仏僧がいました。

現在も西油山の山林の中には、直線に伸びたかつての参道の脇に、四角く区画された坊跡が連なり、かつての繁栄をしのばせています。油山天福寺で注目されるのは、博多綱首と呼ばれた中国商人との関係です。油山天福寺で採集される瓦には、日本のものとは明らかに異なる瓦が含まれ、中国の南宋時代に、浙江省の明州（現在の寧波）あたりから運ばれてきたと考えられます。油山で出土した経筒には、中国製の白磁や陶器を使ったものも含まれており、日本から中国に注文したと考えられます。

3） 油山の梵鐘と薩摩塔

山口県防府市の防府天満宮には、室町時代、山口の守護大名、大内氏が九州に進出した当時、時に油山から持ち去られた梵鐘があります。非常に長い銘文がありますが、油山と宋人との関係を示す資料として注目されています。すなわち、

「大宰府之允、博多津之漓、有練／若、号油山、嶺生真松焉、群仙古／居石間有飛泉矣、諸侶去垢、爰仏／子禅念、昔訪当寺、剃髪受具、／今住他郷、

発願鋳鐘、涓露朝于／海、土壌崇于山、鳧氏成功、必遂／三々之白業、鴻露形、悉驚五々／之昏沈、于時文応辛酉年姑／洗庚午日／大檀那比丘禅念故鄭三／綱真之息／鋳工沙彌生蓮」、「作銘曰。陰陽之工。乾坤之銅。造化異品。陶冶施風。油山靈崛。玖州敬崇。英檀盡力。巧匠成功。木人叩之。鐵關自通。泥牛鳴之。堅窄忽融。三千等覺。九品共逢。報及群類。化被無窮」。

博多綱首と考えられる「鄭三綱真之」の菩提を弔うため、息子の僧侶禅念が寄進したものです。禅念は自身が油山で得度したと述べていますから、博多の中国商人のうちには、子息を出家させて仏門に入れたものもいたようです。他寺にあった禅念がわざわざ亡父の菩提を弔うためこの寺に梵鐘を施入したことからすれば、鄭一族の廟所と意識されていたと考えられ、中国商人たちは、油山天福寺に、祖先の霊魂を祀るため、中国瓦を葺いた位牌堂や納骨堂を営んでいたのではないかと想像させます。彼らの拠点も当然、博多だけでなく樋井川下流の草香江津周辺にあったことが想像されます。

油山天福寺ではまた、異形の石造物の破片が見つかっています。調査の結果、中国浙江省の寧波周辺の梅園村などで産出する石材を用いた「薩摩塔」であると判明しました。さらに薩摩塔に関する研究の進展と関心の高まりの中で、城南区内には田島と茶山に薩摩塔があったこともわかってきました。田島地区の方々の情報提供で、田島の薩摩塔は篠栗南蔵院に移転されたあと水害で行方不明となったことが判明し、我々をおおいに落胆させましたが、江戸時代の地誌や田島地区の郷土誌にも記述があると判明しました。一方茶山の薩摩塔は、茶山の将軍地蔵堂内に安置され今日も大切に祀られています。『別府郷土史研究』第 1 集によれば、茶山六丁目の井上勝氏屋敷がまだ畑であった頃、付近で夜になると人声がして怪しいので、西新町の千眼寺の僧に祈祷してもらったところ、迷っているので世に出たい、祀ってほしいとのお告げがあった。掘ってみると、地蔵らしい石が出てきたので、それを祀ったのが将軍地蔵であると言い伝えています。笠・壺部を失っていますが、須弥壇と軸部・台座が残り、軸部表面には四天王像二体分の彫刻が残っています。

13 世紀までに田島・鳥飼は宮崎宮領となったと推定され、宮崎宮神人の綱首とみられる張英＝日本名鳥飼二郎船頭は鳥飼を拠点としていたと考えられるので、田島や茶山の薩摩塔には、張英が関わっていた可能性も考えられます。

4） 御子神社と堤八幡宮の創建

樋井川 3 丁目の御子神社は、祭神として正殿に安徳天皇を祀っています。社伝によれば、安徳天皇がある年の大晦日に大宰府から糸島郡吉井に遷御された際、白馬に乗ってこの地区を通り過ぎようとして、誤ってシメ縄に引っ掛かり井戸に落ちたとされています。このため、昔から上長尾地区では、白馬は飼わない、正月のシメ縄は飾らない、又井戸を掘ってはならないと言い伝えられています。また、御子神社境内には、左脇殿に末社の祇園社。右脇殿に豊作の祈願、収穫の感謝を行う社日社を祀ってあります。境内には多くの石造物のほか、地域に残る民具や写真を展示した上長尾歴史資料館を併設しています。

堤八幡宮は、社伝によると、鎌倉幕府第三代執権北条泰時の在任期間(1224～1242) に当地へ赴任した地頭職の岡部氏（山梨出身）が鎌倉鶴岡八幡宮を勧請したとされています。当初は一本松川、汐井橋の左岸たもとに鎮座していましたが、享保二年（1717）の洪水により流失したため現在地に移され、享保の飢饉（1732）の際に寄進された狛犬があります。

御子神社の安徳天皇伝承は、当地に平家の所領があり、源平合戦後に没官領となった可能性を示しています。また堤八幡宮の伝承が確かならば、北条政子・義時率いる鎌倉幕府と後鳥羽上皇の主導する朝廷の戦いである承久の変（1221）ののち、八条院領野芥荘の一部が幕府に没収されて勲功のあった御家人に分配された可能性があります。

5） 蒙古襲来と鳥飼の干潟

樋井川河口の鳥飼塩屋橋付近は、竹崎季長が元軍と交戦した場所であるとともに、『蒙古襲来絵詞』には、塩屋の松として、塩田とその経営者の民家があったことを示す記述があります。『蒙古襲来絵詞』によれば、文永十一年（1274）の文永役で、日本軍の反撃にあった元軍は、赤坂から麁原（早良区祖原）と別府（城南区別府）の塚原に退きます。元軍が別府の塚原から鳥飼の汐干潟に向かうのを、竹崎季長一行は追撃するも馬が干潟に足をとられ、とり逃がしました。季長は鳥飼潟の塩屋の松付近で、麁原から出撃した元軍と戦い、馬を射られて痛手を負いました。『絵詞』には、この合戦の情景とともに、鳥飼付近に小高い丘状の地形を描いています。13 世紀後半の鳥飼には、汐が入ってくる干潟があり、製塩を行う塩屋がありました。現在でも、樋井川下流の鳥飼には、塩屋橋の名が残っています。

長尾の「猿田彦大□」には、「文永十年六月　八大宮」銘の石碑があります。この石碑は近世のもので、なぜ文永十年の年号があるのか明らかではありませんが、文永の役の前年であることが気に

なります。文永の役では神風が吹いて元軍を退けたとされますが、この前後、各地で敵国降伏の祈祷が行なわれ、寺や神社の修築も盛んに行なわれました。

またあるいは、元寇恩賞地として当地を宛がわれた九州中南部の武士に対し、それより古い由緒を主張するための年号でしょうか。

6）油山山麓の開発と元寇恩賞地

油山山麓には、元寇恩賞地として御家人たちに分配された土地が点在しており、特に南区柏原遺跡群では、恩賞地にかかわる武士の居館址とみられるものも発掘されています。こうした恩賞地の配分者を考える上で注目されるのが肥後阿蘇氏への恩賞地です。正平十七年（1362）十一月二十八日の「阿蘇山衆徒等料足日記写」に、

「一、惣官御分　為筑前国比伊郷之得分物大小釘分之料足、以同国下座郡之人夫、所有運上当山也」とみえる。この史料に見える所領は阿蘇社領あるいは阿蘇氏領と考えられるので、筑前国比伊郷内に阿蘇社（氏）領が存在したことがわかります。応永二十四年（1417）九月三十日、九州探題渋川道鎮（満頼）は、阿蘇大宮司惟郷に対して、「筑前国早良郡比伊郷内勲功賞田地以下」を相伝の旨に任せて安堵しています。この「勲功の賞」とは弘安蒙古合戦勲功賞を意味すると考えられるので、筑前国早良郡比伊郷内田地以下は阿蘇氏に対する恩賞地と考えられます。永享十二年（1440）四月十日の御教書請以下条々手日記に、「同国（筑前）比伊郷」が見え、阿蘇氏と比伊郷の関係が続いていたことを物語っています。ここで注目されるのは片江２丁目の阿蘇神社です。火災等で古記録を失っていますが、13 世紀に阿蘇氏が比井郷の領主となって以来、15 世紀の室町時代までの間に阿蘇氏所領の鎮守社として勧請された可能性が高いと思われます。

なお阿蘇大明神社の至近距離にある片江Ｂ遺跡では、中世の井戸１基、地下式壙１基、土壙４基がみつかっており、このうち地下式壙に供献された土師器杯は、14 世紀前半頃のもので、付近から墓標と思われる石も見つかっています。

このように元寇恩賞地は非常に狭い土地が多くの御家人に給付されたため、その多くは地点が不明です。しかし古い字図や寺社の言い伝え、鎌倉～室町時代の遺跡や遺物を組み合わせれば今後もっと明らかにできるはずなのです。

7）南北朝の争乱－菊地武時の胴塚と落武者の伝承

正弘三年（1333）三月十三日、正中の変、元弘の変が起こり、警戒した鎮西探題・赤橋英時は九州の武士を博多へ集めました。このとき肥後の菊池武時（寂阿）は 105 騎の軍勢を率いて参上しましたが、少弐貞経・大友貞宗と密約し、鎮西探題館の襲撃を決行しました。しかし、武時の挙兵を時期尚早とみた少弐・大友両氏は、菊池氏を見限って探題方につき、襲撃は失敗、武時以下菊池勢多数が討死し、首級は犬射馬場に懸け並べられました。

地下鉄工事の際、東長寺の前から百個以上の頭蓋骨が発掘され、探題襲撃で討死し、曝し首とされた菊池勢の首級とみられています。鎮西探題館は、『博多日記』等の記事より福岡市博多区の櫛田神社付近と推定されます。武時の死は犬死でしたが、五月七日には足利尊氏らが京都の六波羅探題を攻め落とし、五月二十二日には新田義貞らが鎌倉幕府を攻め滅ぼしました。武時の死はその始まりとなったといえます。

なおこの時討死した菊池武時の首塚と伝える場所が、中央区六本松の護国神社付近に神祠として祀られていますが、はっきりした案内板はなく、見過ごされがちです。また、福岡大学キャンパスの弓道場隣にある５世紀末～６世紀の古墳は、「首塚」と呼ばれ、菊池武時の討ち死にに関わる伝承地の一つであったようです。

菊池神社は、菊池武時がこの地で戦死した事にちなみ、明治二年（1869）に菊池霊社として筑前黒田家によって建立されたものです。境内には菊池武時の胴体を葬ったという胴塚があり、現在柵で囲われて祀られています。菊池氏の支裔である黒田藩士の城武貞が藩主の許しをうけ、天保二年（1831）に建立した墓碑も残っています。「菊池寂阿公之墓」「天保二年辛卯二月建之」の銘があります。また境内の社殿より東側にある寂阿公五百□祭記念碑は、表面に「寂阿公五百□祭□□碑　贈従一位菊池寂阿公之大□父城越前守□□二十代ノ裔孫贈正五位城　武平公□七限□□□修造ス藩主黒田斎清公神社ヲ□□□建□天保三年三月十三日公ノ五百年忌□ニ當リ武平祭主ト為リ祭ヲ祠前ニ□□闔藩ノ名□□詩歌ヲ献ズ尓来一国勤王思想ノ鼓吹□□□今ニ迨テ九□四年武平□テ六十年□　　茲碑　□□□□□」、裏面に「大正十五年四月十三日　武平孫　麻生久子　城 禄子　　建」とあります。

なお武時の法号「寂阿」は、「寂阿弥陀仏」の意味で、念仏者に多い阿弥陀名号です。鎌倉末から南北朝期には、一遍上人の開いた時衆の念仏僧たちが、しばしば戦場の従軍僧となり、武士の帰依を受けており、武時も時衆に帰依して寂阿の法号を授けられたと考えられます。彼らは檀那の一大事（討死）の際には、十念を授け、戦死者を葬送したり、遺骸や遺骨、遺髪などを縁者に届け、

臨終の様子を伝える役割もありました。

赤地殿の塚（東油山５丁目･3）には、菊池武時の家臣の赤星氏がここで力尽きたと伝承しています。赤星氏は、菊池氏十代武房の兄弟の赤星有高を初代とし、文永十一年（1275）の文永の役で、蒙古の武将を捕える勲功を挙げたとされます。さらに二代目の赤星遠基は、娘が菊池武時の室となりましたが、武時の鎮西探題攻撃の際に討死したと伝えています。

南片江２丁目の花立地蔵（首切地蔵）は、.阿弥陀堂の道路を挟んで反対側の階段を上った先にあります。菊池勢の武将の一人が片江まで逃げのびたが、追手に追い詰められてついに自刃した場所に立てられたのが地蔵堂であるとされています。

堤八幡宮の境内にある「お社日さま」は、伝承によると、元弘３年（1333）、菊池武時の鎮西探題攻撃・敗走に加担した堤の住民が菊池軍の敗北により処刑された地（現、城南区樋井川４丁目）に地蔵と社日が祀られていましたが、戦後の開発で地蔵は行方不明となり、社日神が堤八幡宮境内へ移されたと伝えています。春と秋にお祭りが行われています。

堤１丁目の大日堂は、堤八幡宮の近くにあり、伝承によると、菊池武時に加担した堤の住民が菊池軍の敗北で処刑された地（現樋井川４丁目）に本堂が創建され、その後、室町時代に現在地へ移されたということです。大日堂について、「観音があり昔慈福庵という禅寺の本尊なりしという。その寺跡は今も八幡宮の北方にあり、園となる。字を慈福と呼べり」と『筑前国続風土記付録』に記述があります。（内田義弘氏の調査による）

なお菊池氏・赤星氏敗走に関わる伝承が堤周辺に多いこと、当地に九州中部・南部御家人に対する元寇恩賞地が密集することからすれば、証拠となる文献記録は残っていませんが、当地に菊池氏・赤星氏に宛がわれた恩賞地があった可能性がありそうです。

8） 室町時代の田島の領有をめぐる争論

室町時代には、鳥飼・田島の領有をめぐる争いがありました。この地はもともと筥崎宮領でしたが、15 世紀に大内氏が筑前早良郡への支配を強めると、鳥飼や別府は山口の興隆寺領、田島村は筥崎宮領となりました。しかし、「鳥飼内田島」「田島内鳥飼」など、史料表現に混乱がみられ、領域や領有関係が錯綜していたと考えられます。このため両者は相論を繰り返しますが、大内氏の保護を受けた興隆寺が優勢でした。なた筥崎宮領田島村には、「塩浜」四町が存在し、『蒙古襲来絵詞』の「鳥飼潟の塩屋」との関連が注目されます。

文安六年（1449）三月十八日の仁保盛安書状（興隆寺文書）によれば、大内氏の氏寺である周防国氷上山興隆寺（現山口市）の寺領として「鳥飼内田島」がみえ、大内盛見の代（応永十年～永享三年）には寺領となっていました。いっぽう田島村内の塩浜四町・平井大明神免田三町は筥崎宮領で、文正（1466 - 67）以前に同宮から大内氏に返付の申請が出されていました。しかし大内氏からの沙汰がある前に鳥飼の地下人により刈り取られ、また田島内にあった鳥飼より引く井手も押取られたとして、同二年四月五日筥崎宮方から訴えが出されています（筥崎宮代官連署書状案）。15 世紀には、打ち続く戦乱で筥崎宮をはじめとする寺社領や、遠隔地の武士たちに宛がわれた油山山麓の元寇恩賞地は維持が困難になり、下剋上の風潮の中で武装して土豪化した地域住民たちが実力でこれを支配しますが、その裏付けを得るため筑前に進出した大内氏の被官となり、城番として奉仕することもありました。このため大内氏の置いた早良郡代のいた有田・小田部城や荒平城だけでなく、樋井川Ａ遺跡などで、しばしば山口県産の防長系土器が出土するのです。

9） 大内氏の進出と神松寺

片江村の医徳山神松寺は、『筑前国續風土記』によれば、室町時代の永享年中（1429～1441）、南谷聖奭の開山と伝えています。神松寺の名は鎮守に天神・老松の両神を祀っていたことに由来し、本尊は薬師如来でした。天文七年（1538）七月三日、大内義隆の祈願所と定められており（「大府宣」神松寺文書）、大内氏の筑前進出と関係する寺であったことがわかります。天文十四年二月二二日には下片江村内で寺領が桂春首座に安堵されています（「大府宣」井上宣信氏所蔵文書）。古くは末寺として、開山を同じくする龍蔵寺と、のち他宗に転派した能古神宮寺を有していたと伝えます。しかし江戸中期には廃絶し、本尊と開山南谷聖奭の画像のみ民家に伝えられていました。

野芥村の大聖寺は、有済禅門を檀越として南谷聖奭が開山したと伝えています。江戸中期にはすでに全く廃壊していたとされます。神松寺と同時期の開山であれば、15 世紀前半の寺院ということになります。早良区野芥遺跡の発掘では、中世の瓦がまとまって出土しており、調査者は 15 世紀頃かとしています。中世後半期には庭園を構成する池や八角堂を擁し、道路状遺構も検出されています。鬼瓦をはじめ大量の瓦が出土しているなかの雁振瓦の出土は経堂のような性格の建物を想定するならば、寺院等の可能性が考えられます。16 世紀初頭の文書には、「野芥大聖寺」という寺院名がみられ、『筑前国続風土記拾遺』によれ

ば片江神松寺の末寺で、承天寺の末々寺にあたるとされます。大聖寺を末寺とする片江神松寺も、室町時代の永享以前から存在し、大内氏の筑前早良郡の支配が強化された15世紀以降、大内氏の祈願寺となった可能性が考えられるかもしれません。

10) 片江阿弥陀堂の室町時代の板碑

文明十年（1478）の大内政弘宛行状（正任記）に「片江村」とみえ、飯田加賀守家跡である同村の三町の地が安富遠江守（堯祐）に宛行われています。同年十月十八日には同じく飯田加賀守跡の「片江郷村」三町が曾我新蔵人房資に宛行われています（「大内政弘下文案」）。永禄十年（1567）十二月十一日には「片郷村」内の「井料」「八反田」など七箇所を含む計一町五反が中牟田宗慶に宛行われ（「小田部鎮之宛行状」堀内勘左右衛門所蔵文書）、天正十一年（1583）十二月十六日には見出打替坪付として「片郷」のうち金光権衛門尉先給分の一所五反が宗慶に宛行われました（「小田部統房宛行状」）。

南片江２丁目の阿弥陀堂は計４体の板碑が安置されています。地元では「おたいっし様」と呼ばれることもあり、石仏群に向かって左から①子安観音、②地蔵菩薩、③阿弥陀如来、④観音菩薩の順で並んでいますが、③の阿弥陀如来板碑は花崗岩の自然石に、径57．0cmの円相を刻み、その内部に阿弥陀如来の種子（キリーク）３つを刻む珍しいもので、室町時代の阿弥陀信仰をうかがわせます。『筑前国続風土記拾遺』にも、「阿弥陀石仏とて、片江の南の古き松４株の下にあり」と記されています。

松山二丁目の雨乞地蔵板碑は、花崗岩の自然石にキリーク（阿弥陀如来）、サ（観世音菩薩）、サク（勢至菩薩）の阿弥陀三尊を刻んでいます。

田島３丁目の愛宕地蔵菩薩板碑は、砂岩製の小型板碑で、種子カ（地蔵菩薩）を薬研彫りしています。種子カの下に中心線から少し右にずれて「地蔵」の二字を竹彫り（断面Ｕ字型）しています。「地蔵」の二字は後刻であるかも知れません。

御子神社境内にも戦国～近世初頭頃の花崗岩製の板碑があり、表面には地蔵菩薩が薄肉彫されています。これらの板碑は、樋井川村や片江郷などの中世～戦国期村落の信仰活動に伴うもので、領主層よりも下位の有力民衆の自立的な信仰を物語っています。

11) 太閤道と小早川氏の検地

天正十四年（1586）、豊臣秀吉が島津征伐の軍を九州に進め、翌天正十五年四月には、上陸した小早川隆景軍勢は一万騎に達し、早良の平野を埋め尽くしたとされ、原田信種をはじめ福岡周辺の諸将は次々と降伏、帰順しました。秀吉は戦国の戦火で焼失した博多を町割りして再建し、いずれ「博多城」を築いて「唐入り」（朝鮮侵略）の兵站基地にしようと考えていました。結局、侵略の拠点は肥前呼子の名護屋城に置かれましたが、小早川隆景は博多支配のため名島に築城したので、名島城・博多と名古屋城を結ぶ太閤道が重要な役割を果たすこととなりました。『筑前国続風土記』に、「秀吉公、肥前名護屋へ往来したまう時、この道を御通りありという」と記された太閤道は、田島の北から七隈、姪浜の南、山門村の北を通って生の松原へ至ったとされています。『福博古図』にも、「太閤道、生ノ松原二至ル」と記され、『福岡県地理全誌』にも記事があります。城南区内では、区の北部を東西に走り、中村大学交差点の別府交番裏の小道から西に向かい原四つ角まで一直線に伸び、この先は姪浜の唐津街道に合流しています。太閤道は、福岡城下が建設される前は主要な幹線道であったものが、福岡・博多を通る唐津街道が整備されると各所で分断され、役割を終えたとされています。

小早川時代には、福岡周辺でも検地が行なわれ、「指出前之帳」によると片江村は田六八町余（分米616石余）・畠十五町四反余（分大豆63石余）。慶長七年（1602）の検地高1121石余（「慶長石高帳」）。元禄五年（1692）には高1190石余、家数97・寺２，人数463（田圃志）。石高書上帳案の郡帳高も1190石余と記録されています。

3 江戸時代

1) 福岡城の築城と樋井川河道の切り替え

慶長五年（1600）、黒田長政は、関ヶ原の戦いの軍功によって筑前国に封ぜられ、前領主小早川秀秋の居城であった名島城に入りましたが、城下が狭く発展が望めないため、あらたに警固村福崎に築城することとなり、黒田家祖先に地である備前国福岡の名をとって福岡城と名付けました。福岡城の築城が始まったのは慶長六年（1601）で、慶長十三年（1608）に完成したとされています。油山山麓では、城の石垣にするため数多くの古墳が壊されたと伝えており、今でも南区柏原の太平寺古墳群では、石室の石に残されたクサビの跡をみることができます。福岡城の天守閣については、完成せず破却されたとも、完成したあと破却されたとも、諸説があります。寛永四年（1627）には、江戸幕府が諸国に派遣した隠密によって調査報告書がつくられていますが、このうち『筑前筑後肥前肥後探索書』には、福岡城の天守閣に関する記録がないため、これ以前に壊されたと考えら

れています。福岡城築城中だった慶長十年（1605）に作成された『慶長年間筑前国絵図』の段階では、現在ヤフードーム付近で博多湾に直接流入している樋井川が、大濠公園の前身にあたる古鳥飼湾に注いでいる中世末期の状況が描かれています。これに対して、正保三年（1646）作成の『福博惣絵図』（福岡市美術館蔵）では、樋井川の河道はすでに西側に迂回し、西新に注いでいますが、河道の南側に袋状の入江が見られ、依然として「塩やき浜」と注記されています。中世に鳥飼付近にあった塩田が、この段階まで残っていたことを示しています。この絵図ではまた、福岡城に西側に拡がる大濠のなかに、四角い建物が描かれており、友泉亭の前身ともいうべき鳥飼茶屋であると考えられます。『福博古図』には、「鳥飼八幡宮むかしハ鳥飼村ニ有、長政君慶長十三年別野を構玉ふ、其境内に有し故今の地に移さセらるゝ」との書き込みがあり、慶長十三年（1608）、黒田長政が鳥飼村平山に別屋を設けるにあたり、その境内にあった社を「西町」に移しています（『筑前国続風土記付録』）。

2） 片江の開発と鉄炮組

福岡藩領では、17 世紀初頭から開発が奨励され、藩主黒田長政が直々に開発を指示した文書や伝承が残っています。元和元年（1618）には、藩の指示によって志摩郡雷山川河口部・表糟屋郡新原村・那珂郡春日原などで開発が進められました。多くの場合、用水路や池・堤の築造も行われました。開発は年貢量増大が第一の目的でしたが、それに加えて、街道筋や国境などの開発も進められ、地域の景観は急激に変貌しました。元和期（1615～1623）の開発には、田畑を耕作していない農民や、他国へ逃亡した農民が呼び集められました。すでに田畑を耕作している百姓は動かさず、浪人者や余業を専らにする農民、あるいは他国者を集めて開発にあたらせるのが領主の理想でした。大幅に年貢が引き上げられた萩藩領からは、大量の農民が福岡藩領へ移住しています。こうした 17 世紀前半の開発ブームは、寛永十五年（1638）からの牛の大量死（たぶん口蹄疫でしょう）と、それに続く深刻な飢饉によって一時的に停滞しました（江藤彰彦 2008）。また島原の乱（1637）への福岡藩の出兵と、鎖国体制への移行に伴い、博多商人の海外貿易も衰退しました。

城南区周辺でも、元和四年（1618）、福岡藩鉄炮衆が片江村南部に拡がる原野の開発を許されました（「長政公御代御書出令条」）。樋井川Ａ遺跡では、小高い台地上に戦国時代のムラがあり、堀や塀をめぐらして防御した中世の屋敷群があったことが発掘でわかっていましたが、江戸時代前期の 17 世紀前半ごろ、堀をめぐらす中世屋形群は埋め立てられて整地され、それに先立って地鎮が行なわれています。寛永二十年（1643）の長徳寺開基に先立ち、江戸初期まで存続した中世名主層の居館が破却され、堀を埋めた上に地鎮のため鉄鍋・鍬先・和鏡・笄・刀装具・腰刀・懸仏などが埋められていました。黒田藩の支配は、室町・戦国期に大内・大友氏被官層を構成していた土豪層の中世的な自治を解体し、近世的に再編するという明確な方針をもっていたことがうかがえます。

南区野多目１丁目の野多目Ａ遺跡群第４次調査では、戦国時代から江戸時代初め頃の村の跡が発掘され、土器や陶磁器が大量に出土しましたが、17 世紀中頃以降のものはほとんど含まれていません。また奇妙なことに、未使用の擂鉢が穴や井戸の中に大量に捨てられています。この状態に注目した発掘担当者は、『筑前国続風土記拾遺』の「野田目村」・「照天神社」の項に記載された位置関係から、当遺跡は野田目村の住民が正保元年（1644）に、現在の野多目集落に移り住む前の「古村」にあたると推定しました（田中克子 1997）

このように 1640 年代になると、飢饉や、島原乱後の鎖国による博多貿易の衰退など、社会不安の中での一揆を警戒してか、黒田藩は野田目村や樋井川村に残っていた戦国以来の塀や堀をめぐらした防御的な屋敷を破却し、近くの新しい村への強制移住を断行し、切支丹禁令に名を借りた寺檀制で旧来の郷村を大字単位の小さな村単位に再編することで、中世の自治的・防衛的社会を組織的に解体していきます。すると元和年間に片江に入植した鉄砲組には、旧来の住民を威圧し、藩政への抵抗を封じる役割もあったと考えられます。この鉄砲組の設置と、鳥飼茶屋→忘帰台→友泉亭への別邸の移動、金山のお狩場、友泉亭での試射、大鋸谷や柏原の硝煙蔵の設置などに、一連の関係を考えねばならないでしょう。

3） 豪農西嶋家と御影石の石造物

江戸時代には、田島の豪農西嶋家の存在が注目されます。東油山正覚寺は、天正の頃、肥前龍造寺隆信の兵火で焼亡しました。わずかに残った観音堂を守るため、江戸時代の元禄七年（1694）、西嶋氏が僧坊などを再興し、承天寺の大川和尚を招いて再興開山とし、泉福寺を改めて正覚寺としたと伝えます。黒田家の援助もあったようです。

笹丘（田島）墓地六地蔵（城南区笹丘）は樋井川より東方、丘陵の麓の墓地入口にあり、寛永年間頃まで遡るようです。また丘陵頂部に近い西嶋家の墓地には、江戸時代前期（元和など）の年号がみえる、兵庫県の六甲山麓で切り出された御影

石の五輪塔が数基立ち並んでいます。田島八幡神社の境内にも、石燈籠に混じって六甲山系の御影石製の層塔があります。（東面）「干時貞享五年（1688）／五月吉祥日」・（北面）「施主是中有樂？」・（西面）「田嶋村西嶋氏」（南面）「奉寄進御宝前」と判読され、西嶋氏の施入とわかります。

田島神社は、かつて樋井川に薦ヶ渕という深い渕があり、旱魃にならないよう毎年人身御供を捧げていましたが、それに代えて、神楽を奉納するようになったとの伝説があります。明治三年（1870）までは旧藩主黒田家から神楽費として米五俵が下賜されていましたが、明治四年（1871）以降は、「神楽社」が結成され、その後の社会変化のなかでも、氏子によって江戸時代以来の芸能が連綿と伝えられています。平成十年（1998）三月、福岡市指定の無形民俗文化財に指定されました。曲目は神供、両刀、釣舞など11曲以上があります。古くは旧暦の６月１日に行われていましたが、今では夏祭り（７月第２土曜日）に境内で行われ、地域の人々に愛される祭礼として毎年盛況です。

4） 忘帰台

七隈１丁目の末永邸（末永文化センター）敷地内に、黒田藩主が狩りの行き帰りに立ち寄ったと伝える御茶屋の跡があり、城南中学西側の丘である逢坂の小高い所に「忘帰台」の石碑が立っていますが、今は雑木林の中となっています。藩主はこの茶屋で娘からの茶の接待を受けたと言い伝えられており、三百年前は、高台から広々とした「草香江潟」や、その彼方の福岡城を遠望できたと考えられ、風光明媚な眺望に時を忘れ、帰城も忘れるほどだったのでしょう。なお一帯は昭和61 年度から福岡市緑地保全地区に指定されています。

5） 友泉亭の成立

日本庭園が美しい友泉亭公園は、六代福岡藩主黒田継高が宝暦四年（1754）に旧田島村に建てた別荘です。「続風土記付録」などには設置の時期は寛延年中（1748～1751）と記されています。藩儒竹田定直が撰んだ久世通夏卿の「世にたへぬあつさもしらずわき出る　泉を友とむすぶいほりは」の歌が名前の由来とされています。友泉亭完成を記念して、継高が有栖川宮熾仁親王以下十名に求めた友泉亭十景の詠歌集「眼界鐘秀」が「新訂黒田家譜」に収められています。絵画資料としては尾形家絵画資料（県立美術館蔵）の鳥瞰図、および明治十五年（1883）の田島八幡社景図の絵馬（田島八幡宮蔵）があります。

勤倹尚武の家風強く、他藩のような雄大な別荘ではなく面積７～８ha 程度と小さいのが特徴で、西北に福岡城を望み、樋井川の流れと湧水を水源にした池泉や、中島を配した趣のある亭の様子が『筑前国続風土記付録』にも描かれています。また藩主が金山の御狩場で狩猟した際の休憩所でもありました。こうして藩主の遊興・保養の場、緊急時の避難場所、政治・軍事上の機密を要する合議の場として利用されたようで、宝暦十三年福岡城三の丸の下の館の火災では継高やその息女らの避難場所となり、寛政六年（1794）夏の旱魃では九代藩主斉隆が家臣とともに「たみ草のうるほうためと祈るてふわか言のはを天に手向けて」という雨乞いの和歌を詠んでいます。同十年の福岡城下唐人町から出た火事は福岡城内まで延焼し、幼い十代藩主斉清は友泉亭に避難しました。天保年間（1830～1844）には小筒・大筒の試射が行なわれ、嘉永三年（1850）と文久三年（1863）には十一代藩主長溥はここで薩摩鹿児島藩の使者を接見・供応しています。なお斉清の時、亭の風致を増すため別府橋から亭までの田島土手に数百本の桜を植えたということです。

亭内の鎮守八幡宮に供された文化十二年（1815）年銘をもつ鳥居の石柱二本、文政十二年（1829）の建替え時の棟札と嘉永四年の普請棟札（ともに福岡市博物館）が残ります。

6） 庚申天碑

荒江１丁目の有吉氏宅前にある庚申碑は、上部に日月の印しがあり、表面に「庚申」、（表右）明和二乙酉年、（表左）七月廿一日、（裏面）施主／治作／□□／□□／孫三／善吉ヵ／孫市／作□／□□／□□／□□／九□」とあり、1765 年に立てられたものです。

樋井川６丁目の「庚申天」碑は、「明和四天／亥三月六日」とあり、1767 年に建てられたもの、東油山会館の「猿田彦大□」は、左側面に「天保四巳年／二月吉日」銘があり、1833 年に建てられたもので、江戸時代後半には、各地の農村にこうした民間信仰の碑が多く建てられています（福岡市教育委員会編 1993）

『元禄国絵図』には片江村の内として神松寺村がみえますが、『筑前国続風土記』によれば、当村の梨は味が良いとされ古くからの名産で、神松寺梨と称されたということです。

7） 阿蘇神社の「片江数へ唄」碑

阿蘇神社の「日露戦役之紀念」碑の背後の木陰に、「片江数へ唄」の碑が立っています。作者の高木一雄氏（1863～1929）は、昭和四年（1929）に早良郡樋井川村が福岡市に合併した当時の村長さんです。銘文には、「一ツトヤー　日井郷片

江は　草ヶ江の水際(みぎわ)でありしに　依(よ)る名ぞへ　ササ　依る名ぞへ　二ツトヤー　麓に多き　古塚は　村祖の墓なり　壊すなよ　ササ　壊すなよ　三ツトヤー　宮は武岩龍の神　本社は肥後にて　阿蘇神社　ササ阿蘇神社四ツトヤー」とあります。

4　おわりに

城南区は南北7.5㎞、東西４㎞にすぎず、著名な史跡や寺社仏閣も少ないですが、そこに残された限られた資料のなかにも、日本全体と東アジアの歴史がさまざまな形で反映しています。郷土史・地域史の醍醐味はここにあります。しかし今記録しなければ、貴重な歴史の記憶は消え去ってしまいます。今回の連携事業報告が、愛する郷土の歴史に関心をもち、失われゆく土地の記憶をとどめていただく上で、役立つことを願ってやみません。